

利衛門の呪縛から解放されたミチの気分はすこぶる快適だった。久し振りに温泉に浸かって、思い切り手足を伸ばした感触である。

穏やかに晴れ渡った空の下を鼻歌まじりで歩く先に、吉井の渡しが見えてきた。

舟はまだ向こう岸に停まっていたが、既に十人近い客が岸辺に集まっていた。

その人の群から少し離れて、髪を島田に結った娘と、旅姿の若者が訳有り気な表情で向き合っている。ボンボンと声を向こう岸にいた舟はもうこちらに着いていた。

別れの儀式はいつ果てるとも分からない様子だったが、出船ギリギリになって、船頭に急かされた若者がようやく舟に乗り込んだ。

舳先近くに座ってそれとなく二人の様子を見ていたミチは、胴の間に座って両膝の間に顔をうずめたま動こうとしない若者に気になるものを感じた。

舟が棧橋を離れて川の中ほどを過ぎ、岸では娘がまだ千切れるほど手を振っているのに、若者はつつぶしたままそれに応えようとしなかった。

優しく気の弱い若者なのかも知れないが、言い交した者同士、別れにしては少し妙である。

ひそめて何やら話し込んでいるようだ。

すると急に、娘が両手で顔を覆ってしゃがみこんでしまった。その肩が小刻みに震えているのが分る。

脇を通りかかったミチの耳に聞こえて来たのは、若者が娘を懸命に説得する声だった。「僅か三年じゃあないか。頼むから我慢をして待っていてくれよ。三年経ったらきつと一人前になって帰ってくる。親方も、稔ちゃんにそう言っていたじゃないか」そう言っている若者の顔が虚ろである。

言い交した二人が、しばしの別れを惜しんでいる景色だった。

余計な心配だろう、と思い直したミチは、舟が棧橋に着くと真先に降り、若者を振り返ることもなく歩き出した。

辻の茶屋でおにぎりを頼み、食べ終わって出された茶を飲んでいるところに、先ほどの若者がやっと近づいて来るのが見えた。

何と足の遅い人だろう、と目の前を通り過ぎる若者を、茶を飲みながら見送った。

その歩きっぷりがいかにも投げ遣りで、行きたくもない所へシブシブ向かっているように見える。

ゆっくり茶を飲み終えたミチが、そのつもりは無くても、若者を追い越すのは造作も無いことだった。

追い越しざまに若者の顔を覗いてみた。とろんとした目に

生気は無く、何処を見ているのか視線も確かではない。

三年経ったら修業を終えて戻ると言っていた。その時二人はめでたく祝言を挙げるはずである。そんな前途のある顔などではないのだ。

半町ほど歩いてミチは若者を振り返った。若者は相変わらずほけたように歩いている。立ち止まったミチはそのまま若者が近づくのを待った。

道を塞ぐように立っている尼の姿に、若者は小さく驚きの表情を浮かべてミチを見た。だが、再び視線を遠くに泳がせると、のろのろとした足取りでミチの脇を通り抜けようとした。

「同じ舟でしたね」と言っただけでミチは若者の反応を待った。

「.....」

「余計なことかも知れないけど、あなた、何か随分心配事があるようですね」

「.....」

「私をご覧の通りの尼です。あなたの助けになれるとは思いませんが、渡しに乗ってからのあなたの様子がただ事ではないように思えて声をかけました。話してみませんか？」

ミチは茫然と立っている若者の腕にそっと手を添えてそう言った。

ミチがそう言ったままじつと若者の顔色を窺っていると、表情の無かった若者の顔がみるみる赤くなり、目からは大粒

の涙がこぼれはじめた。

道の端に腰をおろして聞いた若者の話はこうだった。

飾り職人の修業をしていた若者は、親方の一人娘、稔、と恋仲になった。

一人前の職人になったら二人の仲を認めよう、という親方の言葉を励みに、懸命に修業に励んでいた或る日、若者は親方夫婦に呼ばれた。

品物の納め先、千足屋の息子が、是非にも稔を嫁にしたいと言っただけだ。

親方夫婦は困った。困って困ってした挙句、夫婦は若者に娘との仲を諦めてくれるよう頼んだ。

上方に修業に出てくれ、その間に娘の方は何とか説得をしろと言った。餞別だと言っただけで十両の金もくれた。

そしてあくまでも上方に修業に行くのだ、娘にはそのように話を合せてくれとも言った。

若者には親方の説得を断れるはずも無かったのだ。

「もう飾り職の修業なんかする気も無い。紹介してくれた先になんか行く気もない。十両の金なんか欲しくもない」

若者は抱えた膝に顔を埋めたまま肩を震わせた。若者にとつて最も大切だった目標が呆気なく消え去ってしまったのだ。

話を聞いていたミチに一つの考えが浮かんだ。震える若者の肩に手をおくと、

「よく分かりました。でも、当ても無く歩いていてもしようが無いでしょ。私と一緒に歩きましょう。少し考えがありません」そう言うと、無理矢理若者の身体を引き起こし、袖口を掴んで歩き始めた。

すれ違う人達が怪訝な表情で二人を見送った。

暖簾を潜ったミチに帳場の六左衛門が気づいた。腰を半分浮かせ、傍で品物を揃えていた手代らしい男に両の手を、団扇を煽ぐようにせわしなく上下させ

「仙吉、早う、早うセキを呼んで来なさい。急いでいそいで」と言った。

仙吉と呼ばれた若い男は、ミチの姿を見て一瞬、おっ、とというような表情を浮かべ、奥に向かいかけてもう一度素早くミチを振り返った。

「いったい誰が来たというねん、この忙しい時に」

仙吉に引きずられて店に出て来たセキは、ミチの姿に気付いた途端、ひゃーともギャーともつかない奇声を発し、仙吉の手を振りほどくと転がるような勢いでミチの前に駆け寄った。

「ミチさん！手紙は何べんかもろて元気なことは分ってたけど、もう会えんと思うてた。それを前触れものう突然現れておどかさなんて、ほんまにいけずや」

ミチの傍にやって来た六左衛門も、

「そうや。あんたは長門に帰ったままもう難波に来ることは無いんやろ思うて諦めてた。あれから何年になるかな？十年？十一年か。そうか、もうそんなになるか・でも、ほんまによう来てくれた。ありがと、ありがと。ほんまにうれしい」

そう言いながら相好を崩してミチに笑いかけたその顔は、何年も離れて暮らしていた娘を迎えた父親の顔だった。

ミチは、父母が暮らす長府に戻った時と違いはあるもの、なんだか我が家の敷居をまたいだ時に似た温かい気持ちに包まれるのを感じた。

大坂の港からそのまま美濃へ向かうつもりになっていたが、今は、若者におせっかいをして遠回りをした自分を褒めたい気分だった。